

両報告へのコメント



西川 正雄 (歴史学研究センター前代表)

今日の二つのお話はいずれももちろんフランス革命に関するものでしたけれど、これまで歴史学研究センターが行ってきた公開講座の場合とはまたひと味違ったものだったと思います。

一つは山崎さんの御報告が、これまでの公開講座では主として政治とか経済とか民衆の動き、あるいはフランス革命の他の地域への影響、そこに焦点が合わされていたのとは違って、まさにフランス革命のいわば前提の一つである啓蒙思想に真正面から焦点を合わせたものだったからです。啓蒙思想はフランス革命の一つの前提となっただけではなくて、その後広くヨーロッパ、そしてそれ以外の地域においても近代社会を考える上での最も重要な古典としての意義を持っていると思います。最近ではヨーロッパ近代に対する批判が一面では出ており、啓蒙思想、あるいは啓蒙の時代に活躍していた人々の主張に一面的な面があったということも指摘されるようになりました。しかし我々が現在の、そしてこれからの自分たちの社会を考えていく上でやはり啓蒙思想から学ぶところは多いだろうし、我々自身が彼らのように自分たちの社会の事を考えていかなければならないであろうと思います。

そういう意味で一般的に啓蒙思想が重要なことは当たり前のこととも言えますけれども、今日の山崎さんのお話の眼目はサン=ジユストという若い人を取り上げたということにありました。先ほど山崎さん自身がおっしゃいましたように、ロベスピエールでさえ革命の勃発当時には31歳だった。考えてみますと坂本龍馬がもし生きていたら明治維新の時33歳なのですね。こういう激動の時期というのは、若い人たちが大いに前面に出て活躍する点に特徴があります。その中の一人がサン=ジユストでした。サン=ジユストについては、私は政治過程で出てくる以上のことを知りませんでしたので、たいへん教えられるところがありました。特にモンテスキューのいわば、一こう言っていていかどうか分かりませんが「パロディ」のようなサン=ジユストの作品についてです。これは山崎さんがそのように解釈して下さったからそう思ったのかもしれませんが、非常に面白く思いました。それから、サン=ジユストの考え方を説明して下さる中で、フランス革命の時にあった、精神的なある緊張感を感じさせるものがあったことを指摘されました。その緊張感の中で、若いサン=ジユストは命を燃焼させて死を迎えた、という説明に納得しました。

実はムカジーさんのお話もそこで共通しているように思いました。ムカジーさんは単なるフランス革命の専門家というよりは、いわば思想史的な観点からヨーロッパの歴史を古代から近代までずっと見ておられている方です。そのムカジーさんのこれまでの研究の蓄積がこのフランス革命の解釈にも表れていると思います。最終的に国家と社会が分離した、そこからある危機感、不安が出てきた、と言われました。フランス革命のある部分の非常に理想主義的な動きが、最終的には恐怖政治やあるいはナポレオンの独裁へと移っていった原因がそこにあるのではないか、そのように私は受け取りました。大変興味深いご指摘ではなかったかと思います。

フランスは実は、19世紀になって、1830年、1848年、1871年のパリ・コミュンと三度も革命が生じた唯一の国なのですね。それはなぜなのかを考える上でも、このフランス大革命がなぜフランスでしか起きなかったかという発想は、色々なことを考えさせられる見方だろうと思います。先ほど質問へのお答えの中で、イギリスから独立した1947年当時、インドではむしろロシア革命の方に関心があったと言われました。市民革命より社会主義革命が身近に感じられていたのです。ロシア革命、これは西ヨーロッパではもう革命が起きないという気分が広がったところで突然起きた革命でした。第一回目1905年、第二回目は1917年。なるほどそれは日露戦争ないし第一次世界大戦と絡み合っていましたから、フランス大革命とは全く同じ次元で比較することはできません。しかし理念の点でかなりの共通面があります。そして1917年のロシア革命に関しても、なぜロシアにしか起きなかったのかという問いを立てることは可能だろうと思います。そういう意味でも今日のムカジーさんのお話は刺激に富んでいました。

* 公開講座当日における「まとめ」の発言を、この『会報』のために多少手直した文章である。